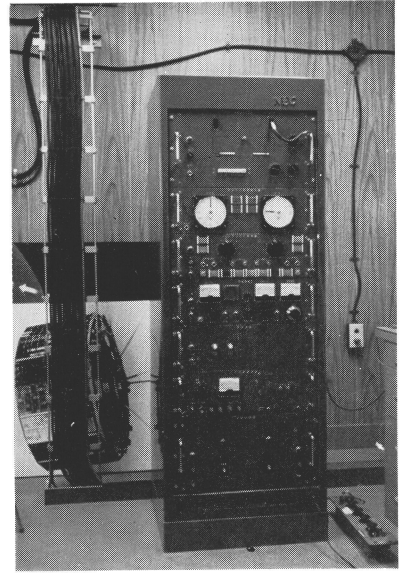


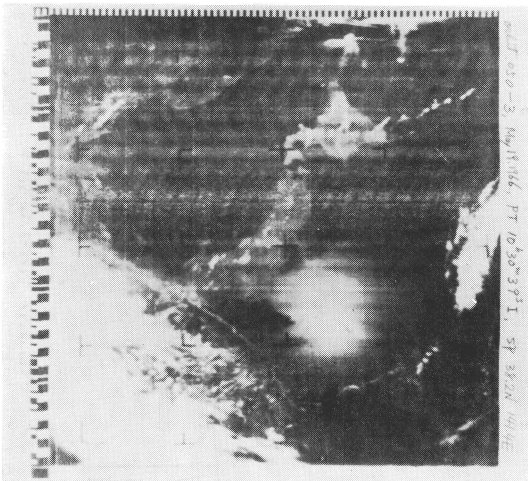
気象研究所の APT 受画装置



APT 受信用のヘルカル空中線



FM 受信機と空中線制御装置



ニンバス衛星が観測した東日本。高い山岳地帯にはまだ雪が残っている。関東沖の白い円は太陽が海面に写っているもの。(昭和41年5月19日10時30分39秒)



APT の画像を記録するための模写電送受画装置

気象研究所の APT 受画装置は昭和40年度科学技術庁特別研究調整費によって昨年10月に日本電気に発注され、今年3月には当台風研究部屋上に設置を終わって同14日から観測をはじめた。町中の悪条件にもかかわらず、受信状態は良好で、衛星が地平線上仰角1度圏内に入ってくると受像が出来るので西太平洋と極東地域に広がる雲の状態を東京で観測出来る。ただフィリピンから南支那海方面の観測が東京からでは充分出来ないのが残念である。

写真に示されたアンテナは反射盤の前が約6m、後が2.5mの長さで重量は基部を含めて約2トンあり天空をいずれの方向にも向けても衛星の動きを追えるようになっている。受信は毎朝7時から始めており、1回の受信が約20分、しかも秒単位の作業なので観測者の苦労は並大抵ではない。

(気象研究所台風研究部：渡辺和夫)